J. Rakuno Gakuen Univ., **26** (2) : 105～123 (2002)

中国・新疆自治区における有畜複合経営の展開条件

市　川　　治*・宮　浦　　徹**・阿 依 努 尔　艾 孜 木***

The development condition of the compound management with livestock breeding in xinjang china

Osamu ICHIKAWA, Toru MIYAURA, Ayinuer AIZIMU
(October 2001)

Ⅰ．新疆ウイグル自治区における活発で「豊かな」食糧生産の現状と課題

Ⅰ．はじめに

21世紀の半ばには，地球上の人口は，今の約2倍の100億人に到達するといわれている。食糧の需給状況という点で世界的にみれば，現状でも一方では「過剰･飽食」状態にある人々がおり，他方では「不足・飢餓」状態の人々がいる。その時期には，食糧生産供給はさらに悪化しその人口の必要な食糧を満たすことができないのではという大きな問題が発生する。とくに，レスター・R・ブラウンなどは地球の温暖化などの環境問題から食糧供給が十分にできないという否定的な論文・主張をしている。とりわけ，供給面と需要面でその鍵を握っているのが，中国であるといわれる。それは，まさに「だれが中国を養うのか」ということである[注1)]。当初念頭にあったこの視点から北京と新疆ウイグルの人々の食生活と，それを担う食糧生産・農業の実態について我々は検討した。僅かな期間の調査であるので即断はできないが，見たかぎりでは，北京や，とくに新疆ウイグルの人々の食糧はほぼ満たされているように思われた。つまり，主食の小麦によるナン・パン類や麺類，米等の穀類，食前に出される果物類（葡萄，梨，桃，林檎，石榴，メロン，西瓜等），肉類も羊肉，牛肉，豚肉，鳥肉，魚肉，さらに野菜類(ピーマン，ほうれん草，トマト，胡瓜，豆・さやえんどう等）など種類が豊富である。勿論，一般的な家庭の日常的な食生活は，質素である。しかし，祝いや歓談・招待・宴会の席では，このように食糧・農産物は豊富で，食卓に溢れている。このような食生活をささえる食糧・農産物は，新疆ウイグル自治区からほぼ供給されている。

本報告では，従来より中国新疆自治区の食料供給を担う有畜複合経営が改革開放経済のもとでどのような展開を遂げようとしているのかを検討することを課題としている。この検討方向とは，有畜複合経営が分解し，酪農や畑作経営，梨や葡萄などの果樹経営や，野菜・施設経営への専業化への道を辿るのか，それとも有畜複合経営として新たな展開をしていけるのかを明確にすることである。とくに，ここでは新たな展開が重要と考えるが，そのためには，どのような条件･支援システム等が必要であるのか，新たな展開の可能性を検討し，展開のための課題の解明をする。

その方法としては，従来研究されてきた山腹の草地・自然放牧地を活用した遊牧経営に関する研究成果や，既存の資料及び論文・著書に有畜複合経営の現状把握と実態調査を加えて明らかにする。とりわけ，新たな展開のための経営経済的な条件と展開のための支援システムの在り方を明確にする。そのために，典型的な有畜複合経営を対象に調査分析をする。すなわち本稿では，中国・新疆自治区に古くから存在する有畜複合経営の展開の現状を把握し，その展開方向を考察し，展開を可能にするための経営経済的な条件，及び展開させるための支援システムの在り方を検討し，明らかにする。

* 農業経済学科　農業会計学研究室
Department of Agricultural Economics, Agricultural account, Rakuno Gakuen University, Ebetsu, Hokkaido, 069-8501 Japan
** 大学院　酪農学研究科
Graduate school, Dairy science, Rakuno Gakuen University, Ebetsu, Hokkaido, 069-8501 Japan
*** 農業経済学科　研究員
Department of Agricultural Economics, research worker, Rakuno Gakuen University, Ebetsu, Hokkaido, 069-8501 Japan

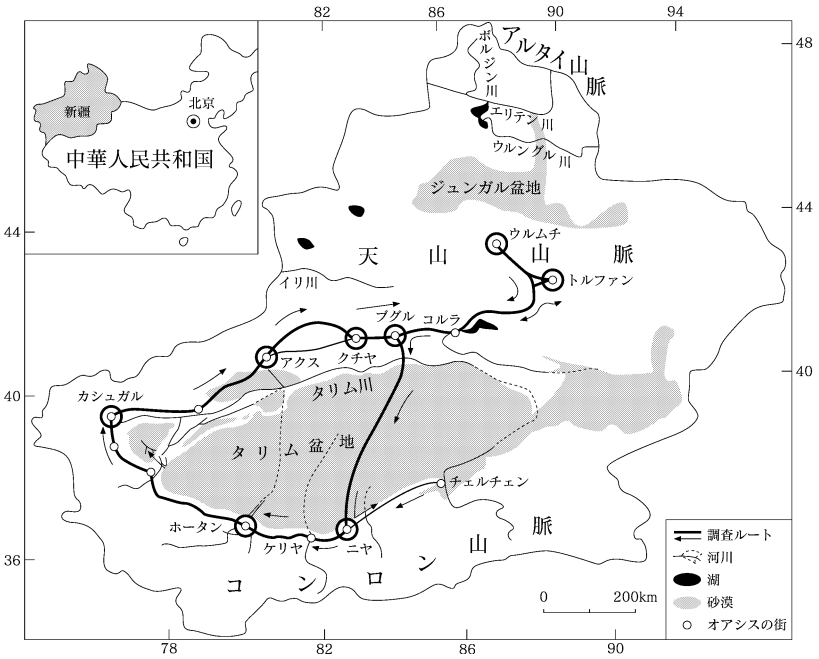


図１　新疆ウイグルの調査地の位置

２．新疆・ウイグル自治区の農業の位置と概況

(1)　新疆・ウイグル自治区の位置と概要

新疆・ウイグル自治区は，その区全体の土地面積は165万km²（中国全土の17%）で日本の4倍強，中国の省・区別で最も広い面積を抱えている（図１参照）。しかし，その耕地面積は，全土地面積の３％に過ぎない，331.07万ha(ウイグル自治区全土地面積の約２％）である(1998年現在)。耕地面積や，砂漠地域が多く住居として適するところが少ないこともあって，そこに住む人口は年々増加しているが，中国の省区別では少ない方の約1,750万人である(表１参照)。この自治区の首都はウルムチ市で，人口は約155万人であり，近代的なビルが立ち並ぶ北海道札幌市に似たような市である。他に地方の中核都市として，我々が調査に訪れたコロラ（コルラ）市やトルファン市，クチャ市，カシュガル市，ホータン（和田）市などの都市がある（図１）。さらに市街地周辺の農村に住む人口は全人口の約半分強の900万人，農村の戸数は全体の43%の約192万戸である。都市と農村に住む人口・世帯にバランスがとられている。このような都市や農村に住む民族は，年々増加し，98年現在ウイグル族814万人(46.6%)，漢民族674万人（38.6%），回族78万人(4.5%)，カザフ族128万人（7.4%），キルギス族16.41万人（0.93%），蒙古族15.9万人（0.9%）などとなっている(特に漢民族の増加が著しい)。つまり，この自治区は，ウイグル族を中心にしているが，多民族によって構成されている。このようなウイグル自治区の人々を養う食糧（穀物）生産は年々増加し，年間約830万tの生産量をほこっている。

表１　新疆・ウイグルの農家戸数・人口と耕地面積の推移

項　　目	1981(80)	1995年	1998年
総　人　口（万人）	1303	1660	1747
農家戸数（万戸）	166.2	181.0	192.3
農村人口（万人）	712.1	866.4	900.53
地　面　積（千ha）	3061	3128.3	3310.72
農家人口１人当たり耕地(a)	26.53	30.47	36.76

資料：白石和良『中国農業必携』（農文協，1997）及び『新疆統計年鑑』1999年版より作成

(2)　新疆・ウイグルの農業の特徴

このような生産量を生み出しているのは，自治区の耕地と草地・放牧地である。つまり，従来より新疆ウイグル・シルクロードの人々を養ってきた重要な生産地は，山の中腹を利用する遊牧地域・草地と中国の全耕地面積の３％である平地の農業地区・農地である。遊牧地域は，綿羊を中心に牛，山羊(馬，駱駝）などの放牧･遊牧経営によって畜産物が生産･供給されている(注２)。農業地区のなかの主軸的な経営が，羊等の畜産を基軸にした畑作・果樹，さらに酪農･野菜などが組み合わされた複合経営である。最近，野菜（花卉）等の施設園芸もウルムチ市周辺に展開してきている（後程紹介）が，この二つの経

営が問題を抱えながらも主に中心的に農村で展開している。その経営の発展展開を象徴するのが，この間の家畜の飼養頭数の増加や他の作物を含めた生産量の増加傾向である。これをみたのが，表２・２－１，３である。家畜とくにその中でも綿羊の増加は著しく，その羊肉生産は中国でも１～２位を争う産地になっている。また，乳用牛の頭数も増加し，生乳生産の増加も中国全土のなかで最も高い地域のひとつである。これについての詳しいデータは収集しきれていないが，表２のような状況にある。

表２　新疆ウイグル自治区の主な農業生産状況の推移

項　　目	1981(80)	1995年	1998年	省区別順位
家畜総頭数　（万頭）	3199.49	3705.33	4223.99	
羊頭数　（万頭）	2105.4	3009.02	3447.38	第３位
乳牛　（万頭）	11	73.4	97	第２位
乳量　（万トン）	4.2	45.2	59.96	第４位
馬　（万頭）	106.9	100.5	100.3	第３位
食糧・作付面積（千ha）	2162.37	1593.29	1573.43	第22位
生産量　（万トン）	386.13	730.16	830.0	
小麦・作付面積（千ha）	1354.83	952.58	966.8	第12位
生産量　（万トン）	213.19	381.21	444	第８位
向日葵　（万トン）	4.59	29.06	20.82	第２位
甜菜・作付面積（千ha）	24.3	71.1	110.75	第３位
生産量　（万トン）	38.5	288.1	513.12	第２位
葡萄・収穫量（万トン）	5.1	48.9	55.5	第１位
綿花・作付面積（千ha）	161.5	742.9	999.26	第１位
生産量　（万トン）	7.9	93.5	140	

資料：白石和良『中国農業必携』（農文協，1997）及び『新疆統計年鑑』1999 年版より作成。

表２－１　新疆ウイグル自治区の農産物生産量・作付面積と家畜飼養頭数の推移

作物・家畜名		1980年	1995年	1997年	1998年	1999年	2000年
米	作付面積（10000mu）	147.6	110.1	123.1	103.6	113.3	117.2
	生産量（万トン）	25.5	47.2	55.3	49.6	54.1	60.3
トウモロコシ	作付面積（10000mu）	833.7	658.7	659.8	642.9	649.4	573.7
	生産量（万トン）	126.5	238.7	294.3	302.3	323.1	298.2
綿　花	作付面積（10000mu）	271.8	1114.4	1325.5	1498.9	1493.9	1518.6
	生産量（万トン）	5.3	99.4	115.0	140.0	140.8	150.0
小　麦	作付面積（10000mu）	2032.3	1428.9	1526.2	1450.2	1332.7	1258.5
	生産量（万トン）	213.0	393.9	437.6	444.0	423.3	405.8
甜　菜	作付面積（10000mu）	36.4	106.7	138.3	166.1	117.8	83.6
	生産量（万トン）	38.5	288.1	388.7	513.1	354.2	292.7
果　実	生産量（万トン）	14.2	114.3	123.7	—	136.4	151.9
牛	（万頭）	250.6	343.5	359.8	364.29	370.52	384.9
乳　牛	（万頭）	11.0	73.4	—	97.0	—	—
牛　乳	（万トン）	4.2	45.2	54.2	60.0	64.8	72.5
羊	（万頭）	2105.4	3009.0	3261.8	3447.4	3592.3	3690.2
山　羊	（万頭）	388.9	471.4	514.6	528.1	555.2	586.7
綿　羊	（万頭）	1716.5	2537.6	2747.2	2919.3	2919.3	3103.5
豚	（万頭）	103.7	135.2	145.7	169.8	188.3	201.5

資料：白石和良著『中国農業必携』及び『中国農業年鑑 98 年版』，『新疆統計年鑑 2000 年版』，『新疆統計年鑑 2001 年版』より作成

注）各作物の作付面積にある mu という単位は中国の耕地面積を表すムー（１毛＝ 6.67 a）である。

表 3 新疆・ウイグル自治区における家畜飼養頭数等の推移

項　　目	1955年	1960年	1965年	1970年	1975年	1980年	1985年	1987年	1995年	1998年
家畜総頭数（万頭）	1640.1	1911.6	2697.5	2431.3	2436.1	2672.6	3016.1	3199.49	3705.33	4233.99
内：羊頭数（万頭）	916.7	1145.2	1674.9	1573.6	1580.2	2105.43	2431.91	2590.29	3009.02	3447.38
家畜当草地（ha /頭）	2.9	2.5	1.8	2.0	2.0	1.8	1.6	—	—	—

資料：黒河功・甫弥加甫『放牧生産方式の展開過程に関する実証的研究』（農林統計協会 1998）及び『新疆統計年鑑』1999 年版などより作成

表 4－1 米の作付面積・生産量の推移

		1980	1995	1997	2000
作付面積	全国	33878.5	30744	31765.2	—
	新疆	98.4	73.4	82.1	117.23
生 産 量	全国	965.5	1768.3	—	1984.9
	新疆	25.5	47.2	—	60.3

資料：「中国農業必携」白石和良著，「中国農業年鑑」1998 年版，中国研究所：「中国年鑑」2001 年版，「新疆統計年鑑 2001」より作成
注）単位については 1000 ヘクタール・万トンである。

表 4－2 甜菜の作付面積と生産量の推移

		1980	1995	1997	2000
作付面積	全国	442.7	695	611.7	—
	新疆	24.3	71.1	92.2	83.63
生 産 量	全国	630.5	1398.4	1496.7	810
	新疆	38.5	288.1	388.7	292.7

資料：4－1に同じである。

表 4－5 果実の生産　　単位：万トン

	1980	1995	2000
全　　国	701.5	4214.6	6120
新　　疆	14.2	114.3	151.8

資料：4－1に同じである。

表 4－3 トウモロコシの作付面積と生産量の推移

		1980	1995	2000
作 付 面 積	全国	20352.8	22776.0	—
	新疆	555.8	439.2	573.67
生　産　量	全国	6260	11198.6	12809
	新疆	126.5	238.7	298.2

資料：4－1に同じである。

表 4－4 綿花の作付面積と生産量の推移

		1979	1995	1997	2000
作付面積	全国	4511.5	5422	4491.2	—
	新疆	161.5	742.9	883.7	1518.59
生 産 量	全国	220.7	476.8	460.2	435
	新疆	5.3	99.4	115.0	150.0

資料：4－1に同じである。

表 4－6 小麦の作付面積と生産量の推移

		1980	1995	1997	2000
作付面積	全国	29227.9	28860	30057.1	—
	新疆	1354.8	952.6	1017.4	573.67
生 産 量	全国	5520.5	10220.7	12328.7	11388
	新疆	213	393.9	437.6	405.8

資料：4－1に同じである。

このように新疆・ウイグルの農業生産は家畜・畜産物や果樹・果実などが盛んである。なかでも，統計数値からすると，綿羊，綿花，果樹・葡萄，甜菜などが中国の省・自治区で最も高い生産量をあげている。他に乳牛･生乳や馬，向日葵（ヒマワリ），羊肉の生産も中国のなかで，中心的な地域になっている。具体的には，次のとおりである。

①農村戸数・人口の増加

この地域にはタクラマカン砂漠（32 万 km²）や山脈が多く自治区のなかで居住可能なところは少ない。したがって，農村に住む人口も，省区別では多い方ではない。しかし，最近都市人口の増加ほどではないが，増加している。このため，これを養うための食糧生産の増加が必要である。そのための努力がなされている。勿論，このことは生産を直接担う人口や農家戸数の増加ということになり，機械化がそれほど進んでいない中国，新疆ウイグルの農業では重要な意味がある。というのは，農業の生産手段･担い手労働力が充足できることを意味しているからである。

②耕地も増大

耕地・草地面積も徐々に拡大してきている。そのことは，人口１人当り耕地の増加として表れており，食糧生産量の増大に帰結している。しかし，家畜との関係では，家畜の飼養頭数の拡大に追い付けず，１頭当たりの草地や，１頭当たりの耕地比率を減少させている。その不足解消のために，家畜の放牧による草地・耕地面積の周辺のあぜ草や収穫後の副産物の活用は進んでいる。すなわち，ここではいたるところに牛・羊・馬等が放牧されていることに示される。こうして全体としての農産物・食糧生産の増大を実現している。

③家畜の総頭数の拡大と生産量の増大

この間の新疆ウイグル農業を象徴するのが，家畜の飼養頭数の増加と生産量の増大である。その家畜生産の中核が綿羊・羊（肉）生産であり，この頭数の増大が全体を牽引している(表３)。また食糧の豊かさの向上を示していると考えられる，乳牛・生乳生産は年々増大し，最も増加率の高い省区のひとつになっている。

④麦等の食糧生産の増加と果樹・甜菜等の増大

主食の小麦，豆類，油料作物の向日葵等も着実に生産し，全体としての食糧・穀物生産が，1978 年の 370 万トンから 88 年の 606 万トン，そして今日 830 万トンと 20 年間で 2.2 倍も増加している（表２参照)。他方従来より中心作物である果実（葡萄，梨，林檎，石榴，桃，メロン等）もよく生産・供給されている。また，甜菜と綿花は中国では最も盛んに生産されている区・地域である（表４参照)。

⑤機械化の進行

さらにこの地域では，省区別で最も農作業における機械化が進行している。95 年現在で，機械耕作比率 87%，機械播種比率 80.4%，機械収穫比率 30.9%となっている。

(3)　経営成果の特徴

これまで統計等よりみたように，人々を養う基本食糧・穀物生産が着実に増加している。また畜産や経営耕地の増加，さらにそれを飼養・担う農村人口が年々増加している。しかし，家畜の頭数増加に比べて，耕地面積は拡大していない。したがって，１頭当たりの耕地・草地面積は減少しているが，各農家はわずかな耕地をていねいに使用し，家族を養えるだけの生産（量）を十分あげているように思われる。すなわちこれは，上記の複合経営のなかには経営的に厳しいものもあったが，新疆・ウイグルの全土に展開しており，食糧，特に畜産物の 70%を生産して，経営成果もかなり高いものになっている。また，他の作目を積極的につくり生産･販売している。結果として，農家１戸当たりの所得・収入は，年間１～２･５万元（日本円で 13～32.5 万円）で，都市にすむ教員・職員の給料と同程度か，それよりも高い水準になっているという。このことは，ある農家の母親に息子や娘の就職について聞くと，第一に公務員，第二に農家・農民にしたいということからもうかがえる。それだけの高い位置付けが農業・農民になされているとみられる。このような実態を，ウルムチ市，及びトルファン市，カシュガル市周辺の農業経営から次に具体的にみることにする。

［注釈］

注１）レスターブラウン『環境と経済のサバイバル･パス』（家の光協会，1998）及び『だれが中国を養うのか？』（ダイヤモンド社，1995)などを参照。

２）詳しくは，黒河功，甫尔加甫『遊牧生産方式の展開過程に関する実証的研究』（農林統計協会，1998）などを参照されたい。

II．有畜複合経営の形成・展開

有畜複合経営の展開方向を要約すると，３つの方向がある。ひとつは，部門の自立化と複合化の効果の促進をめざす個別大規模有畜複合経営化であり，もうひとつは，地域的な支援システムのサポートのもとで維持されている中小規模有畜複合化の展開，さらに分解により畜産や畑作，果樹経営への専業化への進行ということになる。この方向の一端を示す事例については，表２とおりである。具体的には，ウルムチ市の酪畑農家・子刀国とバイ城県，さらに今年の９月に調査した表５～６より考察する。

I．食糧生産を担う個別「農家」･複合経営の特徴と展開

新疆・ウイグル，及び中国の人々の食糧を供給しているのは，省や自治区・地域に存在して，さまざまな作物を栽培し，家畜を飼養している農業経営・農家ということができる。我々が訪れた調査地・調査対象の農家・農業経営から典型的・特徴的なものと考えられる，幾つかの例・農家（企業的経営）を

表５　聞き取り調査によるクチャ・サハク地区の農業概況

項目＼地区	クチャ		サハク	
	1991年	2001年	1991年	2001年
人口	—	31万887人	2870人	3030人
農業世帯数	50472世帯	59925世帯	680世帯	720世帯
農業人口	252239人	284161人	2870人	3030人
総耕地面積	78.01万毌	85.84万毌	0.56万毌	0.88万毌
農業用地	72.3 万毌	70.04万毌	0.55万毌	0.58万毌
牧草地	—	18万9037毌	100毌	800毌
農業機械	2083台	6747台	50台	210台
牛	47080頭	120500頭	670頭	950頭
馬	12600頭	12700頭	80頭	110頭
ロバ	39800頭	43200頭	250頭	410頭
ラクダ	100頭	184頭	—	—
農産物生産量	157704トン	194110トン	350トン	800トン

資料：『新疆統計年鑑 2001 年版』より作成

表 6　新疆ウイグル自治区内農家の農業収入・支出状況　　単位：元

	1985年	1990年	1995年	1998年	1999年	2000年
総 収 入	588.07	1112.01	2414.59	3400.73	2917.09	3129.35
家庭経営収入	530.11	1034.69	2238.71	3232	2734.26	2926.75
純　収　入	394.3	683.47	1136.45	1600.14	1473.17	1618.08
農 業 収 入	253.89	522.84	681.97	1124.38	920.87	1109.39
畜 産 収 入	34.75	25.39	113.88	119.36	179.64	171.18
支　出	1999年	2000年	支　出		1999年	2000年
総　支　出	2818.15	2819.77	家庭経営支出		1138.61	1198.23
農 業 支 出	903.49	934.15	畜 産 支 出		189.64	213.52
生　活　費	1282.49	1236.45	―			

資料：『新疆統計年鑑 2001 年版』より作成
注）1985 年～1998 年の支出の統計数値は現段階では不明である。

まず示すことにしたい。ここから，とくに新疆の複合経営の特徴を明らかにしていくことにする。

(1)　園芸農家

最近ウルムチ市周辺の農村において，園芸農業を行い，生産物を周辺市場（バザール）に販売する農業経営が盛になっている。これは，市街地にすむ人々の要望が高くなってきている反映でもある。そこでここでは，その経営の実像を具体的に南山周辺に展開しているハウス施設園芸・野菜作経営（ピーマン・トマト・白菜・きゅうり・ナス等，及び花も作付け・生産をしている例）からみることにする。この地域の自然条件は厳しく，冬はマイナス 25℃になる。秋にも風が強く，気温が低い。そこで，政府は野菜の温室栽培を奨励しているところでもある（註１）。

１）サージュンリン・38 才・夫婦・子供４人（回族）

この農家は夫婦２人でビニールハウス・60 m×60 m（80 m）を２棟もって（200～300 坪×２），野菜作経営を行っている。主な作付けは，ピーマン・かぼちゃ・トマトである。年間，２～３作を作付けし，収穫している。この収穫したものを市内にあるバザール（市場）で販売し，年間約２万元の生産額がある。このうち費用が半分くらいで，１万元が「所得」であり，それで生活していける（野菜の一部自給している）という。労働時間としては，冬は１日８時間，夏は１日２時間で労働力は２人である。本人たちは，ウイグル以外から参入し，３年間は，政府からの援助・支援を受けて農業経営を行ってきた。一昨年から自分で農業経営を始めたが，当初は費用部分の負担もできない状況であった。しかし，最近は年間２万元位の収入が得られるようになった。

２）ロコジュ・50 才夫婦・子供２人（ウイグル族）

この農家の作付けは，トマト→きゅうり→トマト→ピーマン，ピーマン→白菜・きゅうりである。この作付けの軸にトマトがある。この農家では，ハウスが６棟あり，１棟当たり 7,000～8,000 元の収入になるので，年間収入は 48,000 元になる（ここではニラも栽培している）。トマトは摘花作業など手間がかかるので，この半分が費用とすれば，所得が年間 24,000 元である。

３）王中氏　44 才　妻 42 才　子供２人（漢民族）

この農家は，約 22 年前河南省からこの地にきて農業を営んでいるという。この地域の草分け的な農家（農民）である。この農家の具体的な経営は次のとおりである。施設園芸ハウスが４つあり，中心作目はピーマンである。その品種（新品種・牛角大王）はハルピンから取り入れている。１年間の作付は，年３毛作でピーマン（５ヵ月で播種・収穫）を軸に，白菜（小白菜）－きゅうりであり，ハウス開始以後の 10 年間位，この方式で行っている。ピーマンの１棟当たりの生産量は，3,000 kg とれて，kg 当たりの店頭価格は８元である。このうちの手取りは，販売農家が４元，仲買人は２元，小売人が２元となっている。他の作物は，これより売上が少なく，１棟当たりの売上は，平均で約 10,000 元である。総収入は年間４万元ほどになる。経営費用としての肥料は，有機質肥料（油からとる），羊ふん・混合肥料などを近くの販売農家等より１棟当たり 1,000 元購入している。他の費用は，石炭・燃料費 3,000 元，ハウスのビニール等が 600 元，種子代が 200 元である。従って，所得は 28,000 元ということになる。

４）旺盛な多種目生産の実態

以上の三つ農家にみるとおり，多くの作物を栽培し，市場に販売し，ウルムチ市を中心とする人々の食卓を潤している。しかも，農家の場合には，自給部分もあるので，年間の生活費が１万元前後で都市

住民よりやや豊かな暮らしができるという。この例は，これよりもかなり高い所得を得ているようである。

⑵　耕種･穀物生産中心畑作経営－徐景(シュジュサン)（回族43才夫婦・子供２人）

新疆・ウイグルでは，米の生産は少ないが，他の穀類作物を生産する農家も多い。その代表的な経営形態として次にみるような畑作経営がある。

この農家は，農家としては古くからこの地でやっている。小麦20毛（１毛6.67）＝1.6 haを作付けしており，１毛当たり250 kg（kg＝1.38元）であり，年間6,900元の粗生産額になる。他に，ジャガイモを５毛（0.4 ha）作付けし，15 t×0.45元＝6,750元を売り上げ，合計13,600元の収入を得ている。費用としては，機械費（委託料金･専門の請負人がいる）500～600元，その他肥料費は10％位で労働費が加わる。小麦とイモは自給部分も相当あるという。さらに，パオ経営も行い，他への斡旋業等を行い，5,000元の収入を得て，総収入15,000元位になっている。つまり，とれた穀物等を市場などに販売し，観光業も行い，かなりの収入を得て生計をたてているのである。

⑶　有畜複合経営

新疆・ウイグルの最も代表的な経営形態として，羊等の畜産を基軸に様々な作物を栽培する，次にみるような複合経営がある。

１）アブドレシテー（夫50才・妻45才・子供６人，うち長男結婚，２人は労働力）

この農家は，カシュガルでの典型的な複合経営である。この農家の家畜は綿羊（羊肉）であり，１棟当たり100匹で４棟で400匹を販売し，年間12,000元の収入を得ている。他に，石榴の栽培をしており，年間1.5 tを販売し，6,000元の収入を得ている。さらに，杏４毛で5,400元の収入がある。その他，綿花を栽培している。肥料は化学肥料を使わず，羊の糞を利用しているが，堆肥は不足している。今後はあと3.5毛増える予定になっているので，綿花と石榴を植える予定である。いま現在全部で19毛であるが，さらに開墾をしていく予定である（機械は，トラクター１台持っている）。

２）ユーワンさん･27才夫婦･子供１人（カサフ族）

この農家は，牛馬をもち，観光のパオ経営も行っている（註２）。乳牛は４頭（うち２頭搾乳牛）で，１頭当たり約3,000 kgの搾乳で4,000元の売り上げがある。

羊は50頭（匹）で25頭を販売し6,250元の収入を上げている。また農地は６毛あり，小麦（一部大麦）を作付け，1,800 kgの収穫で２万元の売り上げがある。観光用として，パオ１棟（８万元位）をもち，5,000元（入客収入2,000元，羊肉等売上3,000元）の収入を得ている。合計39,250元の粗生産額であり，所得としては，半分くらいである。３人家族で２万元の収入があり，税金がなく牛の乳を飲み，小麦（大麦）はパン･菓子等を作り生活をしている。金は足りており今のところ満足している。牧畜農家はほぼ１万元で満足しているという。兄弟３人の農家で生計をともにしているようである。パオ（８万円）をもって，観光もしている。観光で5,000元くらい稼ぐ。我々にもお菓子と乳を出し，20元の収入を得た。

以上の二つの例が複合経営の代表的なものである。新疆・ウイグルでは，このような複合経営の他にも，果樹や酪農を中心とする複合経営が多数存在している。次に，そのような経営形態についてみてみることにしたい。

⑷　果樹中心複合経営

１）梨農家－エラーボートン（夫52才，妻48才，息子18才他子供２人）

この農家は，３人で営農している。この農家の土地は14.2毛であり，全部梨園である（他に梨園内には羊が放牧され，自給が中心であるが，羊の飼養生産も行っている）。１毛当たり収穫量が２ tであり，年間28 tの収穫を得ている。売り上げのトータルが37,000元になる。費用としては，肥料代金5,000元，その他農薬など7,000元であるので，年間の所得は約25,000元である。この農家は，この地域の平均的な農家である。

この地域はコロラの有名な梨地帯であり，ここで採れる梨は外国に輸出しているという。この地域（小隊）は，全部で74世帯がある。作付け形態は梨が中心で，他に羊（肉）の放牧・自給している農家経営が中心である。１戸当たり，４人ないし３人の労働力があり，専門の普及技術員が配置されている。この地域では，農業所得で10万～50万元の収入をあげている者もいるほどであるという。

２）葡萄（中心）農家－クルバン農家

この他，トルファンでは葡萄（中心）農家が多数存在している。この地域は雨が少なく，夏は高温で乾燥地域である。しかし，昼と夜の温度差が激しく，地下水路が開発され果樹に適した状況がつくられ，2000年前から葡萄が栽培されている（註３）。全体で

40万毛の葡萄畑があり，480万元の売上がある。農家1戸当たりでは3毛前後の葡萄畑があり，2万元前後の売上がある。例えば，クルバン家では，50才前後の夫婦と3人の子供で，2.2毛の作付けをしている。ここでの葡萄は2つの品種で5トン程度の収穫がある。昨年は，干し葡萄にして販売し，平均より少ないが1万元の収入があった。所得としては，8,000元である(これ以外に，羊の飼育もあるようである)。が，これで十分暮らしていけるという。

(5) 酪畑複合経営・カリー農家

この農家は，一般的な酪畑農家であり，経営主39才，妻36才とこども4人の家族経営である。この地域では，平均よりやや多い乳牛6頭（うち4頭搾乳牛）を飼養し，搾乳している。この乳牛の1頭当たりの搾乳量は，平均3,650 kgである。毎日全部で60 kgほどを販売している。そのトータルの額は，120元×365日＝43,800元であり，近くの都市住民に売り歩いている。畑は6毛もっている。カシュガルの典型的な酪農家であり，訪れたときには牛舎を改築していた。

ここで牛乳販売の方法としては，直接町場の家・住民にもっていく方法と，バザールという市場にもっていくという方法がある。町場の人は，ここで購入し沸かして飲むようである。牛乳加工施設や住民の保存設備が十分でないので，毎日購入する必要があり，販売量の拡大が難しいというのが現状である。

[註釈]

註1）ウルムチ市は，新疆･ウイグルの首都である。これを含む新疆･ウイグル関する報告書･雑誌は，「シルクロード」として発行されている。新疆・ウイグルを知るには，「新疆シルクロードの旅」(香港中国旅遊出版社1999. 3)，北海道新聞社「シルクロード紀行」(1999. 6)，落合宣彦「もうひとつのシルクロード」(小学館1998. 12)などが参考になる。

2）カサフ族などが伝統的に家屋として使用していたパオというテントを張り，そこに観光客を招いて商売をしているものである。前掲著書『遊牧生産方式の展開過程に関する実証的研究』，七戸長生『THE NOMADIZISM IN CHINA』(Hokkaido University Press, Sapporo 1994)，「新疆　シルクロードの旅」などを参照。

3）前掲の「シルクロード」の報告書を参照

4）牛乳の小売りの単価は，1993年の統計ではkg当たり1.413元ということであるが，それと比較して今日では1.6元ほど値上がりしていることになる。それだけ需要が拡大しているように思われる（工藤英一・胡日査・浅川哲郎「中国における農畜産物の価格支持政策」『酪農学園大学紀要（21巻，第2号)』(1997. 2　286頁等）を参照)

[付記] 民族について記入してないところは，ウイグル族である。

2．複合経営から有畜複合化への展開

(1) ウルムチ郊外；酪畑農家・子刀国（りゅうばんこ）の例

1）経営概況

この酪畑農家はウルムチ郊外にある九家湾(チャージュンワン)という村にあり，普通作物の栽培と酪農の有畜複合経営である（しかし，1990年から酪農専業化の動きを示している)。この地区には60戸の農家があり，そのうち9戸が酪(畑)農家で，残りは小麦・トウモロコシを栽培する普通畑作農家である。以前は野菜を作っている農家がかなりあったが，気候・土地条件の問題から最近では減少し，家畜飼養と畑作を行う有畜複合経営農家が増加してきている。これは野菜が安いというのではなく，酪農・畜産を取り入れた複合経営の方が高収益を得ているからである。

家族労働力は経営主（55歳)，妻，次女（22歳）とその婿(25歳)である。経営耕地面積は12.4毛でうち3.4毛に小麦，9毛にとうもろこしを作付けしている。乳牛飼養頭数は6頭でうち3頭が搾乳牛，品種はホルスタインである。労働においては，娘夫婦が酪農部門のほとんどを行い，家畜の購入や牛乳等の生産物販売を経営主が行っている。妻は主に家事に従事し農繁期や忙しい時に手伝いをする形をとっている。

2）各作目の収量（収益と費用）

普通作物（畑作部門）では小麦は1毛当たり400 kg，全体で1,360 kgの収穫量で，トウモロコシは1毛4,000 kg，全体で36,000 kgの収量となる。酪農部門は1頭当たり1日平均22～25 kgの乳量で，3頭で1日の乳量が70 kg，年で約21,000 kgの乳量となる。販売価格に関しては畑作部門は小麦が1 kg当り1.38元で年間1,876.8元である。またトウモロコシは実のみで3,200元の収入になる。酪農部門は牛乳1 kg当り2.4元(政府の酪農牧場では2.6元)で，1日に168元の収入になり，年計算で50,400元となる。よって総収益では約55,500元になる。費用としては配合飼料購入が1 kg 1.18元，毎月2,000

表 7　有畜複合経営の一覧表(1)

経営類型	A有畜複合経営	B有畜複合経営	C有畜複合経営	D有畜複合経営	E酪農（専業）経営
経営形態	羊＋果樹＋綿花	羊＋牛＋観光	果樹＋羊	酪農＋畑作	酪農（加工）企業的経営・(郷鎮企業)
労働力	夫50歳,妻45歳,子供２人	夫27歳・妻	夫52歳･妻48歳,息子18歳	夫39歳･妻36歳,子供４人	１牧場当10人位（牛の管理３，技術員・普及員３，獣医３，牧場長１）他に30人前後，合計60人
作目	ザクロ・杏・綿花	小麦・大麦	梨果樹 梨28t	麦・飼料	牧草，トウモロコシ 牧草（サイレージ）3700t
経営耕地	19毛	農地６毛	梨園14.2毛	畑６毛	牧草地1000毛(12農家に貸し，牧草栽培。それを購入)・粗飼料確保システムの形成
頭数	綿羊400頭	乳牛４頭(搾乳) 羊50頭	羊20頭	乳牛６頭 （作乳牛４頭）	1723頭 （作乳牛865頭）
施設（機械）馬	トラクター１台	光パオ１棟			ミルカーパイプライン，バルククーラーシステムによる品質管理を図る
粗生産額 （収入） （所得）	１万6000元	39250元 ２万元	３万7000元 費肥料代5000元 農薬等7000元 ２万5000元	４万3800元 搾乳量3650kg	1176万元（牛乳売上）（乳は96％自前で加工）他に子牛・育成牛販売（１頭当7000～8000元）〈給与〉女性5600元×３，男性8600元×2,1万元×55
経営の歴史	従来より複合経営	観光を取り入れる。	従来より展開	酪農の導入	1952年から種牛牧場，その後酪農経営・国営企業。1997年から民間企業化。
今後の展開	現状維持	現状維持	現状維持	酪農専業化	地域（的）複合化 （郷鎮企業）

出所：1999 年，2000 年 9 月の調査をもとに作成。

kg を購入することから 2,360 元かかり，乳牛に種付けをする際に 1 回 60 元，これが搾乳牛 3 頭ということから 180 元となる。また作物収穫時期・農繁期に農業地区外から一般の人を約半月ほど 2 ～ 3 人雇用し 1 日 30 元，15 日で 450 元を支払い 3 人として 1,350 元が支払われている。総費用は約 3,890 元となり，この酪農家での純利益は 51,610 元となっている。乳牛が子牛を生み，それが雄の場合，安いときでも 300 元，高いときには 600 元となり販売している。また雌牛誕生の場合でもよい雌である場合は経営に利用することから残すが，悪い場合は 400～500 元程度で販売している。

３）作物・牛乳の販売先

生産される小麦・トウモロコシは主にこの酪畑農家の裏にある新疆農業大学に販売している。小麦は主食にもなることからあまり売らずに自家で利用しており，あまったものを販売している。トウモロコシは，収穫されたものを同様に農業大学に販売し，大学内の牧場で粉砕されてエサとして利用されている。また売れ残りは自家の牛にエサとして与えている。また牛乳も新疆農業大学に販売しているが，大学職員に主に販売している。時には牛乳が足りなくなることもあり，その場合は月末に支払ってもらう金額から少し安くするという形をとっている。また気候的な問題から乳質やその安全性の心配が私達には感じられたが，ここではあまり食味などで問題が生じたことはないという。

４）所有農作業機

技術的側面において注目したことは，所有する機械や農作業機の数であったが，この酪農家ではその所有はしておらず，トラクターは農繁期・収穫期に借りるという形をとっている。機械導入がされつつあるものの，まだトラクターなどの作業機は高価で，最近人気とされる小型トラクターでも 15,000 元である。この農家ではトラクターを借用・利用という方法で高い収入を得ている。

５）肥料・ふん尿処理

肥料は，この農家では化学肥料は利用しておらず，乳牛のふんを堆肥・肥料として経営をしている。堆肥を置く場所については，はっきりとした場所は決めずに畑に野積みの状態で発酵させているようである。しかし，近隣住民からの苦情はないようである。

６）技術指導

経営主は自分自身の経験から経営技術を学び現在にいたっている。農業区には農業技術員，畜牧地域には畜牧技術員がおり指導もしているが，この酪農家では指導を頼んだことはないという。よって指導に頼らず親から子への受け継ぎが農業の基本となっている。

⑵　二つの地区での有畜複合化の特徴

１）トルファンでの有畜複合化

トルファン地区では 3 戸の有畜複合経営農家の調査を実施した。この地区の農業は 2000 年度数値で農家世帯数が 8 万 291 戸，農業人口が約 34 万人で農業

表 8 調査値：トルファン・クチャ地区の統計からみる概況

	人口(人)	農家世帯数(戸)	農業人口(人)	総耕地面積(1000ha)	農業用地(1万毛)	農業機械(台)
新 疆 全 体	18462572	2008794	12231557	3416.5	5083.14	8511720
トルファン地区	551030	80291	342212	39.46	75.58	484872
ク チ ャ 地 区	3406342	503422	2846493	407.71	788.07	767508

資料：『新疆統計年鑑 2001 年版』より作成

表 9 農家1戸当り収入の階層ごとの状況 単位：戸

	0 ～800元	800～1500元	1500～2500元	2500～4000元	4000～5000元	5000元以上
農 家	366	479	365	187	43	60
戸 数	424	484	345	168	38	41

資料：『新疆統計年鑑 2001 年版』より作成
注）この収入ごとの農家階層は新疆ウイグル自治区内にある 1500 戸の農家を抽出し，だされた結果である。

が行われている(表8参照)。ここでの特徴は，従来の羊プラス葡萄栽培を中心に酪農や他の畜産を導入し，有畜化を強化する動きが基本である。調査農家3戸とも有畜複合経営を行い，経営耕地面積及び家畜飼養頭数も大きくなっている。これはあとに記していく郷鎮企業内の農業経営部門であることにもよるが，スマイーさん，カハールさんでは 100 万元を超える所得を得ている。シュウさんにおいては，近年消費が増えつつあるうさぎを今年5月から導入し，現在まだ正式な所得はだされていないが，今後期待ができる経営の一つである。形としてこの3戸の農家は有畜複合経営を行っているとしているが，シュウさんの経営においては，畑作部門はうさぎの飼料生産のために農地を使用し販売する農作物は栽培していないことから，完全な複合経営とはいえず専業的経営となっている。今後は牛・羊などの家畜を導入し，畜産部門の向上を目的としている。このように現在では畜産専業化の動きもみられ，トルファン農業においても，羊・綿羊をもとに古くからに進められてきた有畜複合経営の中に専業化という新たな方向性が見出されてきているのである。調査を進めた中で，この3戸の農家に共通して言えることは，①今後は家畜の導入及び増頭に関して積極的であり，酪農・畜産部門のさらなる発展が見込まれることと，②家畜の導入理由がさらなる所得確保が目的で，それが可能であるのが畜産部門であると考えていること，③以前までは農家ではなく，労働によって蓄積した資金をもとに農業を行いはじめたことである。

この3戸の農家は大規模複合経営として今後も農業を行っていくが，大規模であるがゆえの問題もある。それはこれら大量に生産された農畜産物の販売ルートが確保されておらず，同時にすべての地区の生産物を加工・処理するような工場の存在が不足していることである。小規模であれば，個人の販売も可能（バザール等）であるが大規模複合経営に関しては今後も農業生産を高めていくには，生産から流通・加工といった分野がより成熟しなくては，トルファンの農業生産を阻害してしまう恐れがあると考えるからである。そしてもうひとつは今後大規模複合経営と並んで発展が予想される専業化経営農家が増加を示した場合に家畜ふん尿・堆肥利用を有畜複合が基本の中での地域的視点でその利用・流通をとらえていくことが鍵となると考えるのである。トルファン地区には小規模有畜複合経営・大規模有畜複合経営・専業化経営の3つが存在しているが，基本的な流れとして有畜複合経営が主に行われている。

2）クチャでの有畜複合化

調査ではクチャ地区の農家にも入ることができたが，農業世帯数 50 万 3200 戸，農業人口は約 284 万人で先に記したトルファン地区よりも多く，それにともなって農業粗生産額も大きな地区となっている。ここでの特徴は，やはり有畜化の強化と，同時に専業化の方向がみられることであるが，調査農家3戸はトルファン地区の農家とは異なり，家族経営を中心とした有畜複合経営が進められている。耕地面積はエスズさん・ニアーズさんが9毛，ウメールさんが 18 毛となっていて，乳牛飼養頭数では 10 頭から 15 頭の範囲で生産が行われている。しかし 2000 年度の数値では1戸当たりの飼養頭数が牛 0.39 頭，羊 3.81 頭となっていることから比較するならばこの3戸の農家は家畜飼養に関して中規模となると思われる。農業収入も1万から4万元の範囲となっているが，農家平均が 800 元から 2500 元であり，中間層以上の農家であることが理解できる（表9参照)。この地区の農家調査において注目されるこ

とは，トラクターが導入されていることで，有畜複合経営が基本である農業形態の中で効率的に利用がなされており，機械化もともに進行していることである。また今後においては家族経営の範囲で規模拡大を目的として,経営主と20才前後の若い後継者の２世代で経営を進めていることである。土地購入と家畜導入に関しても意志が強く畑作・畜産の両部門の向上を経営目標としている。しかし問題点として畑作部門は自給的側面が強く，販売を行っていないのが現状となっている。これはトルファン地区と同様に有畜複合経営が基本として農業が行われているが，その中に実質的に専業化の流れがあるということを証明するものである。またもう一つは今後の畜産の発展を考える上で牛乳の販売が不安定であるということである。これは牛乳販売ルートが未開発であり牛乳そのものの不足とそれに関係する飼料不足が生乳の生産・販売を阻害している。よって農業生産が高いクチャ地区においては，農家の生産物販売方法の考慮と牛乳等新鮮さが必要とされる農産物の販売ルートそして加工工場を国として建設・支援し計画的に販売を行っていくことが，クチャ地区の農業を向上させるものと思われる。これらの問題を解決することができれば，有畜複合経営も安定した販売が確保でき，安心してより高い農業生産に取り組むことができると思われる。

よってトルファン同様，クチャ地区も（大・中・小）有畜複合経営・専業（専門）化経営が存在し今後も経営発展がなされていくと思われるが，両経営が大規模化を望んだ経営をしていくのならば，地域的な結びつき，いわゆる地域（内）複合経営を視野にいれていくことが必要になるのではないかと思われる。

⑶　有畜複合経営への展開

このような酪畑農家だけではないが，新疆の経営・農家では自給自足という側面を持ち，無駄のない経営方式をとっている。自分が必要と思うものは残しあとは販売し過剰に生産することはない。ウルムチでは，このように家族労働力で飼養できる範囲内で飼養し，住居と牛舎が隣接して建てられ，いつでも家畜を確認できる構造になっている。生産物販売でも農業大学という販売先が確保されているという好条件もあるが，至る所でバザールが開催されており，自分が生産したものを自由に直接販売することができる条件もある。こういった現状で，無駄のない効率的な経営として有畜複合経営が展開している。確かに新疆の農業も経済的側面から利益増大を目指し複合化がされていることも事実である。しかし，中国の古き伝統から無駄なく利用するという理念のもと農業が行われ，堆肥等肥料も利用してきたことが，中国・新疆での有畜複合経営を維持・展開させているひとつの重要な要因であると考える。

３．地域複合化と郷鎮企業の形成

⑴　有畜複合経営の展開と地域複合化

専業酪農・肉牛経営を創設し，周辺の農家から飼料・粗飼料の供給を受けるというシステムを形成する例が生まれている。これは，自治区政府の支援・指導によって形成されているといってよい。具体的な例は，表７のＥ事例にあたるホトビー種牛育成牧場とこの郷村にある12戸の農家によって構成され，展開しているものである。

１）新疆の先進的な酪農経営－ホトビー種牛育成牧場

この牧場は，1952年から種牛牧場として開始され，開放改革頃から酪農経営も行ってきた国営企業であり，２年前から本格的な民間企業化へと踏み出している。つまり，３年前までは人民公社で国有であったが，それを独立採算制と企業の土地所有などの企業化をしたのである。したがって，働いている人や施設・牛はそのままであるが，企業的経営管理へと移行しつつある。

①この経営の特徴

全体でこの経営内に３牧場があり，１牧場当たり約600頭の乳用牛がいる(搾乳牛300頭)。98年現在で合計1,723頭，この54％が搾乳牛であり，全部で約865頭の搾乳牛がいる。１頭当たり平均乳量7,150 kgであり，生産量が約7,350 tもある。素牛・種牛は，ホルスタイン，シメンタール（フランス・オーストラリア産）などである。ここでは，最近ミルカーパイプライン方式を１牧場で設定・導入している。この辺では最新の方式である。これを軸に，牧場全体に新たな搾乳方式とバルククーラーシステムによる牛乳の品質管理をはかっていくことにしているようである。

農地・土地の所有地は，1,000毛（１毛＝667 m²）であり，それを12世帯の農家に貸して，牧草･トウモロコシを栽培してもらい，それを購入している。この飼料のほとんどをサイレージにし，年間3,700 tの収穫がある。

②流通管理

生産されたものの96％は自前で加工し，ウルムチ市内の専門店に販売している。単価は，１kg当たり1.6元であるので，１頭当たりの売上は11,440元で

表 10 （有畜）複合経営の一覧表

農家名 地域名	スマイル・クルバン （トルファン）	カハル （トルファン）	シュウ・シーキョウ （トルファン）	エズズ （クチャ）	ニアズ （クチャ）	ウメル （クチャ）
経営類型	家族経営	家族経営	共同経営	家族経営	家族経営	家族経営
経営形態	複合経営	複合経営	複合経営	複合経営	複合経営	複合経営
経営耕地	240毛	24毛 内）畑 16毛 放牧地 8毛	190毛 内）畑 160毛 牧草地 30毛	9毛 内）畑 2毛 果物 7毛	9毛	18毛 内）畑地 7毛 果物畑11毛
作物（畑作物・果樹）	葡萄・とうもろこし	畑作（小麦・とうもろこし）・野菜（トマト・白菜・長豆・きゅうり）・葡萄	とうもろこし，アルファルファ，こうりゃん(うさぎの餌として)	小麦・とうもろこし・果実・綿花	小麦・とうもろこし・果実・綿花	小麦・果実（ざくろ・いちじく・杏・棗・山椒・トマト）
家畜種類と頭数	乳牛 8頭 搾乳牛 4頭 綿羊 330頭 ロバ 1頭 ハト 1000羽 アヒル 70羽	肉牛頭数 4500頭 内 肥育牛 3500頭 綿羊 1000頭 確認必要	うさぎ 500羽	不明 牛はいたと聞き取りした	乳牛 14頭 経産牛 5頭 搾乳牛 3頭 馬 1頭 ロバ 1頭	乳牛 13頭 経産牛 3頭 搾乳牛 2頭 キジ 1200羽
労働力 家族構成	43人（内家族労働力3人） 経営主・60歳 奥さん・54歳 息子・23歳	11人（内家族労働力4人） 経営主・45歳 奥さん・40歳 息子（長男）・23歳 （次男）・16歳（後継者）	8人（男性4人，女性4人） 漢族6人（うち男性3人，女性3人） ウイグル族2人（うち男性1人，女性1人）	2人（経営主と奥さん） 経営主・35歳 奥さん・33歳 息子・15歳 10歳	3人（経営主・息子・奥さん） 経営主・45歳 奥さん・40歳 息子・23歳 妻 ・20歳 息子・17歳	2人（主に経営主・息子さん） 経営主・64歳 奥さん・58歳 息子・23歳 妻 ・20歳
労働日数	270日	270日	360日	230日	230日	215日
作業分担	主に経営主 奥さんは補助労働 雇用者3人，牛・羊の管理，残りの人は葡萄の作業	経営主が肥育管理 奥さんが野菜・畑作を行なう 雇用者7人が牛・羊の管理 野菜の管理を1～2人が担当（農繁期）	畑とウサギは8人で作業 畑4人（女性2人）ウサギ4人（女性2人） シュウシーさん 生産・経営管理，コーウサイリンさん 技術部門担当	農業生産は経営主と奥さんが主に経営している。	農業全般・トラクター運転を経営主と息子が，奥さんは農作業の補助，奥さんは販売も。	経営主が畜産・農業の全体，息子も同様である。奥さんは時間がある時・農繁期に補助作業。
農繁期 農閑期	3～11月 12～2月	3～11月 12～2月	1～12月 なし	9月1日～10月1日 夏	9～10月 4～5月 6～8月	6～7月，9月15日～10月 なし
施設(機械)馬	ロバ1頭	不明	不明	トラクターなし 牛舎あり	トラクター2台，牛舎，サイロあり，馬1頭	トラクター1台所有
粗生産額 (収入) (所得)	収入 106.8万元 内葡萄 100万元 牛・羊 2万元 牛乳 4.8万元	・収入104.5万元 ・農業所得10万元 牛 肉70%（7万元）， 羊 肉20%（2万元）， 野 菜6%（6千元）， その他4%（4千元）	不明 収入 3000元 支出（ ）元	・農業総収入 1万元 ・農業支出 3000元	・総収入1万500～2万元 ・農業支出 7000元 牛販売 5万2千元	・総収入 3～4万元 ・農業支出 1万4500元
経営の歴史 成立契機	以前は公務員，多くの所得を得たいことから17年前に葡萄をつくり始める。	1982年，小麦・とうもろこしと羊の飼養をはじめ，1995年から肉牛の肥育を行いはじめる。牛を導入したのは，羊を飼養するよりももうかることからさらなる所得の確保を目的で。	以前は近くにある油田で働いており，それで得た資金をもとに，畑を行なっていた。今年(5月)から，ウサギの飼養を始める。所得の確保目的で，近隣にうさぎを入れている農家がないことと消費が増えていることから。	不明	園芸・果樹をもとに昔から農業を行っていて，そこで得た利益をもとにトラクターを購入。そこで現在搾乳も。	家畜を導入したのは，利益が多く，飼い易さ，病気が少なく，繁殖率高いから。
問題	村の幹部の人達の指示を受けられない。	村の幹部の指示を受けられない。流動資金が足りない，飼料畑の不足。	ウサギの販売に関して。資金不足，ウサギの流通・販売ルートの確保と政府の協力体制。	貸し付け資金の返済期限を長くしてほしい。サイレージの不足と飼料が高い。	ミルクの販売量が不足しているので乳量の増加を。飼料の不足と高さ。	畜舎の規模が小さい，飼料不足。牛乳の販売が難しい。工場がない。
今後の意向	畜産の拡大 葡萄の新品種や牛・羊の新品種の導入。	家族経営における規模拡大し，農業を継続していく。飼料の加工利用高める。50頭の乳牛を飼養したい。家畜の給水施設の向上。	共同経営で農業を継続，規模拡大を行なう。牛・羊の飼養も考慮していく。	農業は継続し今後も家族経営で規模拡大，乳牛増頭と繁殖を行いたい。	農業は継続していき，家族経営で規模拡大を行なっていく。	家族経営で規模拡大を。土地を購入し，生産を拡大。両部門増やす。

2001年度共同研究「新疆ウイグル自治区農業実態調査」聞き取り調査より作成。

ある（日本円148,720円）。平均の乳質4.5%であり，現段階では体細胞は規定していない。これで全体を計算すると，経営全体では1,176万元の販売額（日本円で約1.5億円）ということになる。その他，子牛・育成牛（6ヵ月以上）の販売価格は，1頭当たり7,000～8,000元である。なお，専門店での牛乳の販売小売り価格は，250mℓ×4＝0.75×4元＝3元＝1kg・1リットル当たり3元（日本円で約39円）程度ということになる（註4）。

③労務管理・労働力

ここでの労働力は，従来の国営・人民公社で働いていた人を雇用している。1牧場当たり10人前後の労働力を配置している。具体的には，牛の管理3人（女性），技術員・普及員・3人，獣医3人，牧場長1人となっている。この他，生産分野を担う労働力が30人前後いる。ここから全体を推計すると，合計60人程度が生産販売・流通管理に参加している。給与は，女性の労働力（3人）は1人当たり5,600元，後は年令・経験年数が関連している。1人当たり8,600元×2人，他の人は1万元くらいとなっている。

2）大規模酪農経営

この経営は，これからの新疆・ウイグルにおける酪農経営のひとつの方向を予測させるような経営である。とくに，これはウイグルのなかで最も先進的な酪農技術を導入し，フランスからの新品種の乳牛を導入し，高い生産性をあげつつある企業的経営である。従来の経営を引き継いでいるので，経営内容などはこれからということができる。が，このような技術導入とそれに関連する経営管理が明確になっていくならば，飛躍的な展開が可能になるように思われる。しかも，地域の他の農家との連携システムも形成されている。

⑵　有畜複合経営の展開としての郷鎮企業の形成

もうひとつは，地域の農家や経営者が資本を蓄積し，大規模有畜複合経営を形成する動きがみられる。多くは，それは郷鎮企業として展開している。

具体的には，表10の2経営がそれに該当する。その特徴は，次の通りである。

1）郷鎮企業の説明と形成背景

最初に郷鎮企業がどういったものであるかを説明すると，農村内部に出現した新たな産業（農村内部における非農業部門）のことであり，かつて人民公社時代に公社や生産大隊などが経営した「社隊企業」が人民公社の解体によって郷営や村営の集団経営企業に再編されたものである。1984年以降になると，「社隊企業」に加え，「私営企業」やパートナーシップ経営という「民営企業」を含めて，農村企業は全て「郷鎮企業」と呼ばれるようになる。つまり，非農業部門という郷鎮企業は，人民公社の集団システムの解体と事実上の家族農業経営制度である生産請負制を導入してからの農村改革の一つ成功例である。郷鎮企業の形成目的は，①農村経済の繁栄，②農民の収入水準の向上，③農村内過剰労働力の吸収にあったのである。

表11－1　新疆郷鎮企業の現状

単位：億人，億元

年度	相目	職員	総産出値	年間給与総額	固定資産額	利潤	税金	工業総産出値	増加出値
1996	全国	1.4	76706.5	25114.3*	16051.3	4350.8	1436.4	35538.7	17659
	新疆	0.1	171.9	9.6	77.9	15.7	7.7	57.5	52.3
1997	全国	1.3	89900.6	5827.1	65851.5	4555.5	1526.3	65851.5	20740.3
	新疆	0.1	253.0	28.8	99.3	17.2	9.2	8.1	4.8
1998	全国	1.3	96693.7	6251.9	21566.5	46365.6	1583.0	691227.7	22186.5
	新疆	0.1	245.7	29.0	92.4	15.7	8.2	111.2	60.3

注1．「＊」とは郷村企業（集団企業）のデータを指す。
注2．表中のデータは「中国郷鎮企業統計年鑑」（1997，1998，1999年版）から引取

表11－2　1998年新疆郷鎮企業の中で集団企業と私有企業の比重状況

単位：万個・万人・億元

	指　標　値				合計数の中で占めた比重（%）			
	企業数量	職員	総産値	増加出値	企業数量	職員	総産値	増加割合
合　　計	26.9	71.3	245.74	60.3	100	100	100	100
集団企業	0.5	19.1	81.3	19.6	1.9	26.8	33.1	32.4
私有企業	26.4	52.14	164.4	40.8	98.1	73.2	66.9	67.6

資料：「中国郷鎮企業統計年鑑」（1999年版）から引取

新疆自治区における郷鎮企業は，改革開放の初期から独立部門となっているが，1985年から1995年までに急速に発展し，1995年からは安定的に成長している。新疆の郷鎮企業は，自治区内の経済繁栄に貢献し同時に農牧民の収入と農村社会における就職問題を解決する方面で大きく貢献をしている。

2）郷鎮企業の構造

郷鎮企業の一般的な構造をみると，集団企業（かつての社隊企業）と私有企業（個別経営，農家共同経営―民営企業）という区分ができる。現在の新疆の郷鎮企業は，主に私営企業に依存して成長を遂げている。こういった企業成長は新疆農業における有畜複合経営の発展・展開の中で新たな動きをみせている。よって新疆郷鎮企業は，事業構造そのものが多角化し，衣類，食品製造，野菜，果樹，食品加工，乳製品，セメント，プレハブ部材等の農業，工業，建築業，交通運転，旅行，飲食などの事業を手がけ現在の発展にいたっている（表11－1，11－2参照）。

3）郷鎮企業の特徴

有畜複合経営とともに発展をしてきた郷鎮企業は，地域によって違いはあるものの，ある程度の成長を遂げ，企業構造・産品構造などにおいて合理化を進めている。表8にあるトルファンの3戸の農家は新疆内農業においてかなりの大規模経営であるが，3戸の農家とも私有経営形態的な郷鎮企業である。この3農家は，畑(小麦，とうもろこし，葡萄，野菜）や酪農及び畜産で経営発展を行ってきたが，市場・地域の特徴を生かし，農産物等をもとにした新産品の開発を行うという動きもみられる。郷鎮企業は地域にとって，そして農業生産向上に大きな役割を果たし，さらには改革解放後の新疆農業を支えてきた側面を兼ね備え大規模な農業経営を行うことで，地域内の農業者・農家のモデル的存在となっている。トルファンの3農家の事例内容をみるとそれは明らかであるが，郷鎮企業内で行われる大規模有畜複合経営は伝統的そして零細な規模で数多く存在する小規模有畜複合経営と相反するものとして存在するのではなく地域農業全体を維持し，いわゆる地域複合的な要素をもちながら農業生産を行うのが郷鎮企業の特徴である。

4．有畜複合経営の展開と支援システム

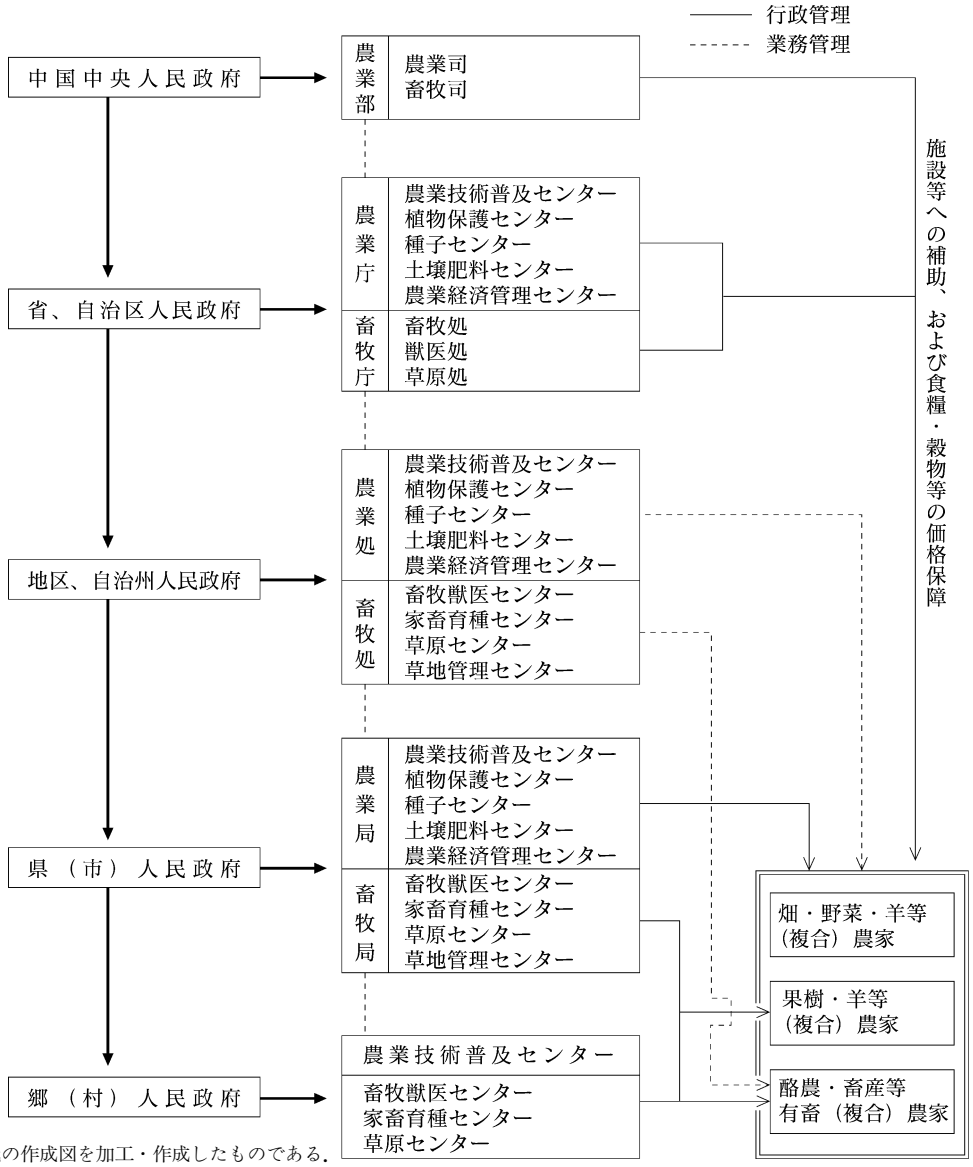
バイ県は，ウルムチとカシュガルの中間に位置しており，人口約20万人の農業県である。農家戸数は約3万戸で農家人口は14～15万人である。全体の80～90％は，1人当り30頭の羊，1世帯当り3頭ほどの牛がいるといわれるような，羊・牛等の酪農・畜産＋畑作・果樹の複合経営地帯である。最近，酪農家650戸のうち酪農専業農家が150戸ほど生まれてきている。だが，依然として酪農を軸にした有畜複合経営が主流であり，県（人民）政府はそれへの支援と推進体制を整備して進めている。例えば，ミジク郷コムドン村でひとつのモデル共同経営がある。これは，40戸で構成されており，個別経営では羊･牛と畑作･ひまわり，及び若干の野菜作（西瓜），菜種畑などをもつ複合経営である。個別の1戸当たり耕地は25毛，30頭ほどの羊(牛)，馬などがいる。他に共同の小麦畑(1,200毛)，とうもろこし畑(700毛)，ひまわり畑(150～200毛)などがある。これらを含めて1戸当たり1.5～2万元の収入がある。これは，県行政のあと押しのもとに進められており，共同化のモデルとその農業支援システムは，新疆自治区の代表的な例でもある。

また新疆の流通システムの改革は，1990年代に入り，流通の自由化・自由市場化の進行ということができる。この流通は，大きくは3つ位に分けられる。穀類等の食糧は，ひとつは基本的には政府系集荷と市場取引や加工業者―小売業者を通じて消費者に販売される（綿花・菜種油）が，もうひとつの流れとしては，民間業者の集荷を通じて小売から一般消費者へと供給されていく。相当の部分は農家で自家消費される。さらに，一部は農村で定期的に開催されているバザール（市場）で直接販売されている。青果物は，一部は政府系の商業部門を通じての取引があるが，路上や（公設）バザールでの販売が大部分になっている。基本的な流れは，政府の管理から民間流通，流通の自由化の方向に進んでいる。これにより，小量･多品目の農畜産物の販売･流通がスムースにいっているとみられる。

Ⅲ．有畜複合経営の展開のための支援システムと今後の課題

新疆ウイグルの農業生産・食料供給の基軸である有畜複合経営の展開事例の幾つかについてこれまでみてきた。この展開を支えている，あるいは支えていくものは何か，これを明らかにすることが大切である。つまり，新疆ウイグルの農業生産・農業経営にとって欠くことができないものが幾つかある。とくに，これからみる支援システムは最も重要なもののひとつであると考える。ここでは，これまでの展開をふまえて支援システムについて検討することにする。

中国の経済的な諸条件を考えると，新疆ウイグル



資料：艾尼瓦尔艾山氏の作成図を加工・作成したものである．

図 2　新疆ウイグル自治区の農業・畜産支援システムの模式図

のある西部地域は農民１人当りの純収入が低い地域に属している。しかし，最近新疆ウイグル自治区では，西部開発の一環として天然ガス，石油などの発掘が進んでおり，地域経済の活性化が顕著である。このような開発・経済の活性化の一環としても農業の振興は重要な課題であり，この振興が強く求められる。豊かな農業生産・食料の安定的な供給こそが地域の活性化の基本的な柱である。これまでみたように，ここでの農業の基本は有畜複合農業である。すなわち，それは従来からの小規模有畜複合経営によって担われてきた。この有畜複合経営がどのように展開していくか，その展開のための支援システムはどのようなものか，どのように形成するかが重要である。しかも，その展開には様々な課題がある。これらの支援システムの形成内容と今後の展開の可能性について検討していくことする。

そこで，具体的にこの支援システムの内容についてまずみていくことにする。

Ⅰ．有畜複合経営を支える仕組み・内容とは

(1)　国から郷・むらまでの推進体制の確立

有畜複合農業の展開を支える仕組みとしては，図２にみるとおりである。つまり，国，省・自治区の地方政府，県政府，郷政府が其々の担当する部･庁･処などを通じて，その普及（推進）をする局・センターを設置し，農業・畜産生産を推進・管理している。そして，各人民政府は序列が明確であり，其々の役割と連携した推進を実施している。

例えば，バイ県では，バイ県人民政府が郷人民政府とともに，県は，農業局や畜産局を指導し，郷政府は，センターの業務を管理している。つまり，県人民政府は，郷人民政府を指導すると同時に，局・センターを通じて農民･農家の生産活動（生活活動）を推進している。とくに，新しい作物の推進指導や施設整備への補助事業などを実施している。バイ県での調査地では，政府・局・センターによって，前述のように農家の生産の共同化がモデル事業として指導されていた。また，ウルムチ市では，野菜生産のためのハウス施設の推進とそこへ全額補助を実施していた。この他，地域の農業生産の試験的な農場等の試験場を設置している。

⑵ 価格保障と補助・事業制度

このような推進体制とともに,生産されたものの,従来はほとんどを，最近は食糧を中心にかなりのものを政府が買い上げている。つまり，政府が管理しているのである。このような管理は，徐々に緩和されている。すなわち，自由市場での取引される割合が増加してきているのである。しかし，主な作物・生産物は，政府及び従来の人民公社から会社化された「公的」企業によって管理されている。例えば，トルファンの葡萄地区・販売観光は政府の管轄になっている。

２．農畜産物の流通と支援システム

⑴ 農畜産物生産・供給の現況

前章において農業生産を担う農業経営を大雑把に５つに分類し，多種多様な作物を生産する幾つかの農家や酪農企業経営の実態を報告してきた。とりわけ，この地区は農地・草地が少ない乾燥地帯であるが，放牧・遊牧地や平地の農業地区の様々な草・飼料基盤を活用した羊等の畜産物（牛乳生産を含む）を基軸に，果物，畑作・綿花，野菜など多様な生産をし，地区内外に供給している。特に，羊（肉）の生産･供給は盛んで,ウイグルの人たちの生活の隅々まで行き渡っている(注１)。これを経営の再生産という視点から整理してみると，これまでみた経営のなかで最も所得・収入が低いのが，7,500 元位である。地区全体では，１戸当たり平均農業所得は10,000 元位であるといわれているが，調査では，それよりも高所得農家が多数存在していた。全体としては，施設園芸・野菜農家や梨（複合）農家が高い「所得」をあげているようであるが，酪農家もかなり高額の所得をあげており，羊・畜産と果樹の複合農家・経営も高い生産量と生産性をあげている（もちろん，平場の農業地区の一部の農家を調査しての判断である)。新疆･ウイグル地区で盛んに栽培をしている,政府推進作物である綿花中心農家については，今回調査することができなかったが，綿花の「過剰」傾向から価格の低下により十分な所得がえられず，農家の経営は厳しいようである。

これらの農家・農業経営によって生産されたものは，新疆・ウイグルの人々の食卓を満たしている。それどころか，梨などの果物のように，作物によっては輸出しているものもある。しかし，水が不足するこの地区では米などの生産量は絶対的に不足しており，地区内の生産による自給は困難であり，他の省区から受け入れている。だが，全体としては地域の農業生産による食料供給率，地区内生産による自給率は 100％を越えているようである。

⑵ 流通状況

生産されたものは，従来は基本的に政府によって管理されてきたが，図３－１，３－２にみるように，改革開放の近年,特に 1990 年代に入りその流通も大きく変化してきている。その変化は，ひとことでいうならば流通の自由化・自由市場化の進行ということができる。この流通の変化は，大きくは３つ位に分けられる。穀類等を中心とする食糧は，ひとつは基本的には政府系集荷と市場取引や加工業者―小売業者を通じて消費者に販売されるが，もうひとつの流れとしては，民間業者の集荷を通じて小売から一般消費者へと供給されていく。もちろん，相当の部分は農家で自家消費される。さらに，一部は農村で定期的に開催されているバザール（市場）で直接販売されている(注２)。これに対して，青果物の取引は，一部は政府系の商業部門を通じての取引になっているが，ウイグル自治区でみられたような路上やバザールでの販売が大部分になっている。つまり，自由市場を通じての取引が中心になっているようである(注３)。また牛乳生産は，酪農家が自ら市場あるいは市街地の都市住民に直接販売をするか，ウルムチ市にみられるような酪農企業的経営により，自ら加工を行い，乳製品販売の専門店やデパートで消費者に販売している。このように基本的な流れは，政府の管理から民間流通，流通の自由化の方向に進んでいるように思われる。

３．新疆ウイグルの農業生産と需給と課題

⑴ 経営の維持・展開と課題

これまでみてきたように，この地区の経営形態の基本は，農地・放牧地や畦・のり面を隅々までよく

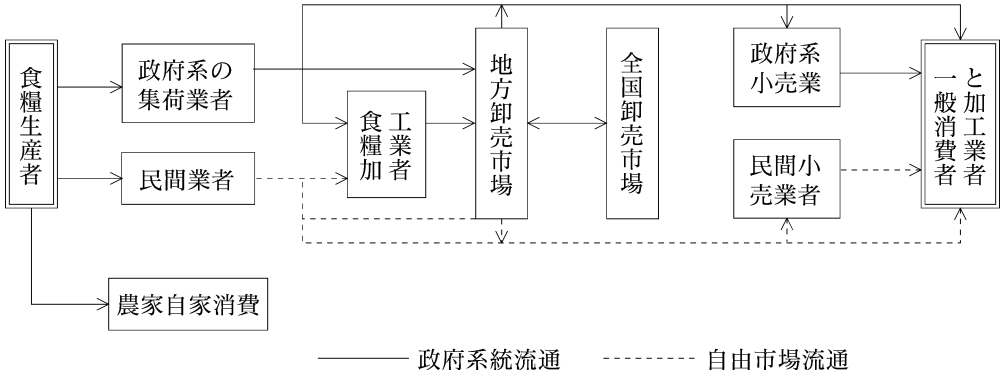


図 3－1　食糧流通の仕組み・自由化の動向（1992 年以降）

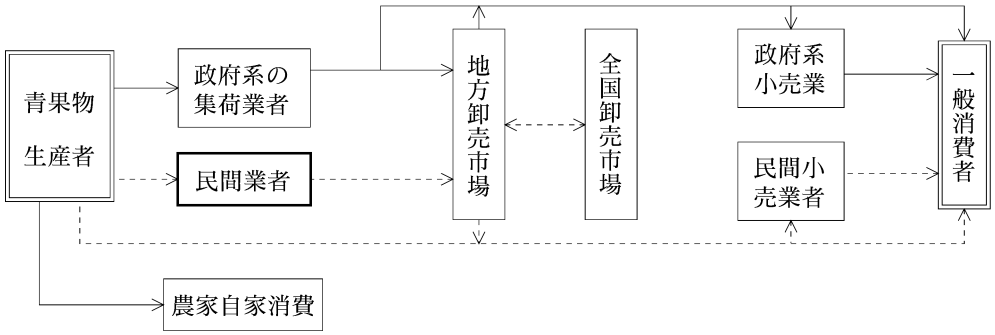


図 3－2　青果物流通の流れ模式

活用しての羊（牛）等の畜産を基軸にした畑と肉牛・果実と肉牛などの有畜複合経営である。しかし，最近新疆・ウイグルでも開放経済・自由競争の動きのもとで，内容の変化が生まれつつある。つまり，この複合経営が市場原理の浸透のもとで，その生産供給のあり方や，経営規模のあり方，さらに経営形態の変更などを余儀なくされつつある。現実的には，いままで先進国や日本が辿ったと同じような酪農経営の専業化，梨や葡萄などの果樹経営や，野菜・施設経営の専業化への道と従来の有畜複合経営の部門間の結合方法を検討し，部門ごとの確立を模索するというふたつの方向のように思われる。一方的な専業化・単一化の動きは，果たして新疆・ウイグルの農民の生産や人々の生活の向上になりうるのか，十分な検討を要する。いずれにしても，農業地帯では，従来の有畜複合経営を十分検討し，新たな内容をふまえた経営体として安定的に発展させていくことが重要である。でなければ，新疆･ウイグルの約 1,750 万人の人口を養っていくことができないように考えられる。他の国々・先進国などの展開を参考に，中国新疆・ウイグルにあった生産・経営システムを検討していく必要がある。これらのシステムを中国・新疆ウイグル自治区で検討し，形成・展開をさせていけるならば，今後の益々の農業生産の発展が可能になると考える。

⑵　新疆・ウイグルの人々の新たな食生活のための課題

食糧生産の経営形態で比較的生産性の高いものが，乳牛と羊，梨と羊等の複合経営であることはこれまでみてきたとおりである。このなかで牛乳は，先にみたとおり，1ℓ当たり約 3 元という高価（日本の物価水準で換算すると 4 ～ 5 倍の価格で 1ℓ当たり 1,000 円）であるが，最近特に需要は高まっているようで，都市の人々は毎日 3 人家族で 0.5ℓ強購入し，飲んでいる。これは，肉類を好み，乳製品を旺盛に食するという，洋風化ともいうべき食生活の変化の表れともみられる。したがって，牛乳の生産と販売は，今後も十分発展していけるように思われたし，生産に意欲をもつ農民・酪農家も存在していた。しかし，ここでの課題は，牛乳の集荷方法や加工処理施設の近代化などが進んでいないということである。とくに，加工方法に大きな問題を抱えており，全土に消費が拡大していきにくい状況にある。

この点をどのような方法で改善していくかが大きな課題である。

⑶ 流通・加工上の課題

上記のように生産されたものは，政府が主に管理し，消費者に販売するものと，流通の自由化進行のもとで直接（公設）市場（バザール）や住居に持っていって直接消費者へ販売するものとがある。特に青果物は，直売という形態で路上（庭先）で販売するものも多いようである。いずれの形態も其々のよさがあるが，流通の仕組みと加工施設が十分整備されていないように思われた。先の牛乳だけでなく，肉類や果実の加工施設も十分には整備されていないようである。せっかくとれたものが，消費されずに無駄になるものが相当あるようである。牛乳などは，都市住民を中心に高い需要はあるが，加工施設がないゆえに，農家では販売できる範囲で牛を飼っているのが現状である。これらをいかに整備していくかは，これからのこの地区の農業の展開に大きな影響を与えると考える。

⑷ これからの展望

以上，これまでの調査（注４）をもとに新疆・ウイグルの農業（経営）と食糧供給，及び自給状況についてみてきたが，様々な課題を抱えながらこの地区の農業と食糧供給は急速に発展してきているように思われた。とくに，農業を担う人々・労働力は家族労働力が基本であり，その家族の元気な仕事ぶり・姿は印象的であった。これらの姿からも，この地区のこれからの農業発展が大いに期待される。それだけの息吹を新疆・ウイグルの農民や人々は，はじめて訪れた人々にも感じさせるのである。

また，当初念頭にあった中国･新疆ウイグルの人々の食糧は確保されていくのであろうかという点では，いまのところ我々の答えは肯定的である。中国全体では，さまざまな分析がなされており，評価もまだ定まっていないようである（注５）。しかし，この地区の生産供給状況を垣間見た段階では，大きな変動がないかぎり，順調に推移していくものと考える。勿論，課題としてあげた点や，改善しなければならない点など，さらに研究を深めていかなければ，正確な判断はできない。これらについては，我々の今後の課題にしていきたいと考えている。

４．複合経営展開のための支援システムの形成と課題

中国の農業・酪農生産は人民公社の解体と「生産責任制」の制定で大きく変化した。同時にこれは農業者の経営に対する意志も変化させ，その意欲が農業生産に大きな影響をもたらしてきたが，それは新疆ウイグルも同様である。事例に記した酪畑農家の経営主の話からその意欲が伺えたが，こういった条件のよい酪農家ばかりがあるわけでなく，現実として生活することも厳しい農家も多くある。この打開策の一つとして家畜を飼養し畑作を行う複合経営，いわゆる有畜複合経営が行われているのである。農家調査中，なぜ複合経営をしていくのかと質問したところ，経営・生活の向上と農業の維持のためにもという答えが返ってきた。日本・とくに北海道では専業化し高い所得を得ることを目的にしたことから，戦前は普通とされた複合経営はいつしか特別なものになりつつある。中国で根強く複合経営が行われているのは，「中国独特の文化だから」というのではなく，農業者の中に必然的にしなくてはならないもの，またなくては生活ができないものととして考えられているからだと思われる。新疆ウイグルは中国の中でも重要な農業生産地域であることは，今まで述べてきたところである。近年牛乳の飲用が増加傾向にある。従って今後専業形態の酪農家が増加していくとすれば，広大な土地をもつ中国といえども「ふん尿処理問題」等の日本と同様な問題が発生し，また生産物の販売や市場流通，生産物管理や保管が最重要な問題として考えられる。中国では前図のような支援システムもあるが，全体にそれが行き渡るようなシステムづくりは今後さらに検討していく必要がある。ウイグル地区ではまだ乳牛の飼養よりも羊・綿羊・ヤギといった家畜の放牧の方に目が向けられており，ウイグルの文化あるいは地域性を考慮した発展が必要であると考える。

新疆ウイグル自治区では耕地面積も増加傾向にあるが，「タクラマカン砂漠」のあるこの地区は，砂漠そのものをただの観光名所にするのか，あるいは農業生産に活かすため，砂漠化の防止と耕地化を求めていくのか，産業廃棄物を廃棄するような場所にしてしまうのか。今後さらなる発展を望むのであれば，広大な耕地をもつからこそ，砂漠をどう位置づけていくのかが，中国全体の問題として検討していくべき課題であると思われる。現在，中国の農業生産は複合経営を中心に農家経営が進められているが，今後これがどのように変化し，専業化が農業者にどう注目を受けていくのか，酪農そのものが中国という国の中にどう位置づけられていくのかが大きな課題であると考える。また，図にみたような支援システムを農家の自発的な生産（加工）活動の強化・育成

に繋げた仕組みにしていく必要がある。

［注釈］

注１）2000年２月19日午後２時半からの「5,500 km激走－餃子ロードの旅」の放映があった。それは，地井武男が中国・キルギスの餃子をたどる旅であった。そのなかでトルファンやカシュガルでの餃子を食してみせた。そこで使用されている食材の肉は，まさに羊肉である。また，地域ごとにあるバザールで食していくものの主たるものが羊肉の料理なのである。それだけ羊肉(羊乳)，綿羊の食料生産としての役割は大きい。また，その流通もほとんどが直接バザール（市場）で加工品を販売するか，卸売り業･小売に販売される。それを店舗を経営する人が購入しバザールで直接販売しているというものである。

２）厳善平『中国農村･農業経済の転換』（勁草書房1997．9　186～203頁）に食糧流通・流通市場化の流れについて詳しく説明されている。これを参照した。

３）加藤弘之編『中国の農村発展と市場化』（世界思想社1995．78～97頁）の菅沼圭輔「第３章農産物流通の自由化と広域流通の展開」で青果物などの流通の自由化の動きが詳しく述べられている。例えば，自由化市場での取引では，1990年野菜75.8％　畜産物68.2％，水産物89.1％，果物80.3％となっており，全体でも30％位が自由市場で取引されているという。

４）前章ですでに報告したが，調査対象地はこの地区の首都ウルムチ市を中心に西側・中国国境に近いカシュガル市の農村･農家である。まだ，地域ごとに詳しい農家・農村調査を実施したわけでなく，地域の農家の一端をみたというものである。

５）最近の研究著書でも，この点を言及している論文は多い。例えば，河原昌一郎『中国の農業と農村』（農文協　1999．3　64～83頁）や前掲の厳善平氏の著書などがあげられる。

［付記］　本稿は，前述したとおり農業経済学科の研修として，中国・新疆ウイグル地区に訪れる機会を得て，調査を各地でさせていただいて作成したものである。本報告作成及び調査･資料収集に際しては，新疆農業大学のアニワル・アイサン教授をはじめ，オブリ助教授，パルハット講師，新疆農業大学校の教員・職員，新疆ウイグル自治区内の農家，関係機関・団体の職員など多くの方々のご協力をいただいた。これらの方々に深く感謝の意を表する次第である。

また本学の共同研究（干場教授，野助教授，發地助教授，堂地助教授，岡本教授，元文理科短期大学教授　後藤先生，札幌学院大学　光武教授　本学大学院　川上さん，本学学生　森田さん）に心よく参加させていただいたことにも深く感謝する次第である。